

平成29年度 学校関係者評価報告書

学校法人中村学園
静岡福祉医療専門学校
自己点検・学校評価推進室

公益社団法人静岡県職業教育振興会による「静岡県版ガイドライン」をベースにして本学独自の自己点検・評価を実施し、まとめた平成30年3月8日付「平成29年度自己点検・評価報告書」を元に、学校関係者評価を行いました。

なお、下記の一部の項目についてはすでに改善のための方策を実施しております。

平成29年度学校関係者評価委員及び事務局

<関連団体>

鳥羽 茂氏 特定非営利活動法人 静岡県ボランティア協会 事務局長

<保育関係>

斉藤 裕子氏 社会福祉法人 愛育会 小百合キンダーホーム 園長

<卒業生>

川崎 誠之 氏 社会福祉法人 駿河会 特別養護老人ホーム晃の園 相談員兼ケアマネジャー

加藤 浩和 氏 社会福祉法人 秀生会 特別養護老人ホーム ヴィラージュ富士 介護福祉士

<事務局：本学教員>

中村 徹 理事長・校長

有賀 浩 教頭・教育部長

中村 健太郎 教育改革推進室室長代理

富田 順子 教務課長・医療情報秘書科 学科長

後藤 明子 子ども心理学科 学科長

磯野 博 総合福祉学科 学科長

三嶋 秀子 介護福祉学科 学科長

1. 教育理念・目標

【現状と問題点】

- ・建学の精神を根本の理念とし、挨拶を基調とした全人教育を徹底。現代倫理科目においては昨年の反省に基づき、アクティブラーニングの手法を取り入れたグループワークをブラッシュアップして行い、教育の成果を高めることができた。
- ・全ての学生に「笑顔」で明るい挨拶ができるよう、学生指導を徹底した。多くの来客からその挨拶を高評価して頂いている。また学内全体が一段と活気づいている。
- ・入学前事前指導（ステップアップレッスン）、新入生オリエンテーションを通して早い時期から教育方針・学ぶ内容の理解を促すことができた。
- ・他にもない自分のために環境を整えること。そのための清掃であることを理解

	<p>させた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・業界との連携（教育課程編成委員会、各種情報交換会、実習巡回時の情報交換、卒業生を囲む会等）により業界ニーズを把握し、学生の希望とのギャップを狭めるよう努めている。 ・自主実習を上手に利用し、職場体験することで、保育園のイメージが明確になり保育実習指導が分かりやすくなった。 ・保育技術と同時に子どもを見る目の力をつけてきたが、社会人としてのマナーは今後も指導が必要である。 ・現場実習を重ねることで少しずつではあるが、探求意識が出てきた。実習で指導を受けたことをなど基に、次の実習への課題として認識できるようになった。個人指導を重ねることで、一人一人の底上げにも繋がった。 ・学生が自ら外部に出向きボランティアや職場体験を経験し、世界を広げた反面、参加したことに満足してしまい、自らの課題を見つけ出すには至らなかった学生もいた。 ・継続的な学生指導によって本学のモットーである「挨拶の励行」は定着している。一方、実習では実習態度を指摘される学生も出ている。
<p>【改善のための方策】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教室配置の変更が完了。子ども心理学科において、付帯施設である保育園“キッズハウスひかり”と同校舎になったため、学生が子どもを身近に感じることができ、関わりを持つ機会が増えた。 ・職場体験や自主実習を通して仕事のイメージを明確にする。『社会人常識マナー検定』については1年次に全員の取得を目指す。 ・各学科、学年を超越して実習終了後に報告会を行い、振り返りの時間を十分にとり、課題への認識を高めていく。学校生活における目標の明確化と、将来像具現化への指導を徹底する。 ・実習や就職活動など、学外の活動こそが本学の名前を背負っている自覚を高める学生指導を行う。 ・学内研修時に、学校・学科を超越しての教員間情報交換ワークグループの回数を増やし、交流を深める。 ・視能訓練士養成科においては、電子情報カレッジとのコラボを模索したい。「画像処理、画像制作」をポイントに、当該分野専門の教員と情報交換し連携を図る。
<p>【関係者評価】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学科だけに捉われない全人教育、人間性を豊かにする取り組みが素晴らしい。 ・子どもを身近に感じられる環境が整っているため、保育士として働く時有利である。 ・実習中の学生の成長が人材養成につながっている（PDCA サイクルの活用）。 ・個別指導がきちんとできていると感じる。
<p>2. 教育活動</p>	
<p>【現状と問題点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム・シラバス・講師派遣等の面では、今年度も引き続き各分野の企業・施設・病院・各種団体からバックアップしていただいたため、より実践的な授業内容となり、学生も熱心に取組むことができた。 ・職業とキャリア、社会人常識マナー検定に対する指導を強化。また、当該検定を受験させ、学習成果を確認、学生の職業キャリア意識と社会常識力向上を目指した。 ・授業の問題点に対する課題提案や改善につなげるために、前期・後期終了後（計

	<p>2回) に授業アンケートを実施した。その結果に基づき、教員個々で授業点検・評価・改善を実施した。その結果をまだ十分反映させるまでできていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コマシラバス、教材についての電子化を引き続き推進。過去の教材もそのまま蓄積され、学生が課外で活用するなど、メリットが増えている。 ・アクティブラーニングが定着し、それぞれの教科にふんだんに取り入れている。「チームワークで何かをまとめる力」だけでなく、コミュニケーション能力の向上がみられた。 ・教育課程編成委員会を年度内2回実施。各業界の動向に合わせ、学科・コース別に教育課程へのアドバイスを頂き、教育活動全般に反映することができた。 ・「話せる学生」を育成するため、授業において学生が話す機会を頻繁に設けた。また、このことについては入学前事前指導「ステップアップレッスン」でも取り上げ、周知を図った。 ・障害がある学生への個別指導を、差別なく、他学生と対等な環境で学べるように指導をし、一定の成果が挙げられた。 ・成績不良者への個別指導(補講)を各期終了後(全4回)のタイミングで行い、学習意欲の喪失からのドロップアウトを防ぐことができた。結果、学校全体で退学者を大幅に減らすことができた。 ・資格、検定試験においては、昨年度に比べ非常に良い結果を得ることができた。 ・ひとりひとりの学生のレベルに合わせて指導しているが、基礎学力の差や家庭環境など、本人を取り巻く環境にも配慮しながらの指導が必要となってきた。 ・社会人等に向けて「実務者研修」「初任者研修」「国家試験対策」「キャリアデザイン研修」等、それぞれのニーズに合わせて、講座を開講した。 ・キッズハウスひかりでの職場体験においては園長先生の授業や現場の先生方の細やかな指導が受けられ実習についての大きな学びとなった。 ・18歳から選挙権が与えられるようになったことを踏まえ、学生に選挙や政治についての関心を持たせるための授業を行った。
<p>【改善のための方策】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生個々に応じた指導が必要であることから、個人面接を強化する。 ・これまで積み重ねてきた各種の地域活動に対する関係団体からの評価は引きつづき高いので、学年、学科、学校を越えた活動として再構築していく。 ・学生一人一人に対するキャリア指導を強化し、脱落することを防止する。 ・一段と変化の激しい当該業界で働くにあたり、「自信を持って」「自ら考え行動でき」「障壁を自力で乗り越えていく」力の養成に注力する。そのためにキャリア教育を基軸とした新たなカリキュラムの導入、職業教育・キャリア教育財団によるテキスト「未来ノート」の活用も含め、研究を進める。 ・障害の度合いを明確にし、適切な関わりや指導法を考え、導いていく。 ・読解力、判断力がつくように自分の言葉で話すこと書くことができるように訓練する。 ・アクティブラーニングの手法で学年・学科を超えた合同授業を実施したい。上級生のリーダーシップ、下級生の知識の向上を目指し、主体的に学ぶ環境を提供する。また、毎回のテーマを一人の教員が決め進行すること、授業終了後、授業の在り方の振り返り等、研究授業としての位置づけを兼ねて実施する。
<p>【関係者評価】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校への期待は「即戦力」「技術」「知識+技術」働いた時に差異化が図れるようになってほしい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・発達障害、精神的に弱い等はこの業界でも抱える問題。就業後の判明も出てきている。個別支援がどこまでできるかで結果が変わってくる。 ・今の学生は自分の言葉で表すことや、伝えることを苦手である。そのため就業後の早期退職につながっている。 ・コミュニケーション能力向上に努め、話す・書くことができる教育が確立されているように感じる。
3. 学生受入れ	
【現状と問題点】	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力の極めて高い学生のサポートもあり、在校生と入学希望者とが打ち解け、談笑するシーンも多くみられた。 ・学科紹介やオープンキャンパスの「のぼり」を電子情報の学生がデザイン・制作し、各校舎のホールに設置。広報的な効果を高めている。 ・高等学校への出張授業を実施。社会福祉分野に興味のある生徒を対象に、当該分野の仕事説明、ソーシャルワークの入門としてグループワークを実施。参加生徒が積極的に取り組み、効果の高い授業となった。 ・留学生をスムーズに受け入れるため、担当教員が外部研修に参加した。 ・職業観を身に付ける体験授業などに工夫を凝らし、学生募集に結び付けていった。その活動には学生にも参加してもらった。 ・医療職の希望が激増していることに対し、事務職の希望者数が激減しているように感じる。とりあえず、第一志望の医療職が不合格だったら事務職も検討という生徒が多くみられた。 ・介護福祉士受験要件に「実務者研修」修了が義務化されたが、理解されていない方が多く、思うような受講者増に繋がっていかなかったように感じる。
【改善のための方策】	<ul style="list-style-type: none"> ・医療界のニーズを調査し新しい学科、コースとして企画、独自性を打ち出し、商業実務分野から離れ、医療分野における新規学生獲得を目指し、学科の検討をしていく。 ・学科の改編を計画する。介護福祉学科と総合福祉学科を今後統合していくかについて検討していく。 ・オープンキャンパス体験授業への参加回数の多い生徒が増えてきていることを踏まえ、学生や卒業生にも協力を求め、体験内容を充実させる。 ・高等学校等への出前授業について、内容のバージョンアップ、種類を増やし、ニーズに応える。 ・オフィシャルサイトの内容充実を図る。 ・子ども心理学科の学内実習設備が本館なのに対し、オープンキャンパスが2号館での開催となることで、少しちぐはぐな対応になってしまうところがあるので、改善できるか検討していく。 ・社会人講座の受講生増を図る。施設等を訪問し、資格の必要性やスキルアップの重要性を直接伝えるなど広報活動を活発化させる。 ・入国管理法改正により、福祉・介護分野の留学生の受け入れが急増することが予測される。日本語学校等とも連携・情報交換しながら、本学も受け入れに向けての環境を更に整えていく。 ・近郊の競合校が増えている中での学生募集に向け、広報と連携しながら、募集活動に注力する。
【関係者評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・幼少期から仕事（保育・介護）に対する良いイメージを持てるようにしてい

	<p>たい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長期休暇中のボランティアの受け入れをし、楽しい、おもしろいが伝わるようにしているが、給与面で避けられてしまっている。 ・小学校のボランティア活動が養成校への進学につながるようにならないか。 ・仕事のイメージを幅広く伝えていくようにしたい。
4. 教職員組織	
【現状と問題点】	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的技術並びに教育力向上について、教員研修の機会を増やした。またその政界については学内研修にて情報共有し、教員のレベル向上を図った。 ・教員の役割分担を明確にし、また、情報交換を密に取りながら組織作りに取り組んだ。保育所・幼稚園・児童福祉施設関係とそれぞれの専門に教員を分配し、業務整理を進めた。 ・日々の学生指導や実習指導など、担任や担当が一人で抱えこまず、学科内で共有できるよう心掛けた。 ・障害や問題を抱える学生の指導は組織的に行っている。また、実習を節目にしたPDCA サイクルを念頭に置き学生のストレンクスを引き出す指導も定着したが、対処療法的指導が散見される。
【改善のための方策】	<ul style="list-style-type: none"> ・教育力、専門性の両面について、各学科の特性に合わせ、計画性をもった研修計画と実施、そのまとめと学内での情報共有を行う。 ・教育方法に関する教員研修に加えカウンセリングの基礎を学ぶ研修を検討する。 ・文部科学大臣認定の職業実践専門課程としての責務を負い、専門職大学・専門職短期大学も視野に入れながら、地域のニーズに合致し、より良い職業教育が行えるよう、教員組織に配慮、教員自身も幼稚園・保育園・施設・病院等と連携することで、教員自ら現場の状況を把握する。 ・学科会議や職員会議を有効に活用し、学生の課題や悩みに対して早期発見・早期対応できるようにする。対応困難な学生への支援・指導方法に関する定期的な研修を行う。特に、入学直後や実習前後、長期休講前後の時期はきめ細かな指導・対応を実践する。 ・現場の実習指導では卒業生にかなりお世話になった。今後も卒業生と連絡を取りながら、職業実践専門課程を活用する。
【関係者評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・先生方が温かい。向かい合い、寄り添い、学びを支えている。 ・実習での教員との情報交換が重要な機会。現場の進化を教員に伝えることができる。 ・新入職員に教育係（エルダー制）導入している。「どう育てる」かが話題になる。 ・教員と職員との交流の場を増やしたらどうか。 ・社会人になっても学生気分が抜けない。現場職員が授業を行ったらどうか。
5. 施設・設備等	
【現状と問題点】	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども心理学科が本館に移動したことで、学科の特徴を環境設備に反映することができた。また、同校舎内に保育所があるため、保育現場を実際に見ることができることから、学生のモチベーションも高まった。 ・福祉、医療、子ども分野も ICT が欠かせないことから、学内インターネット環

	<p>境が整備されている教室を活用している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生と教員が協力し、学内掲示等も学科らしい明るい雰囲気を作った。 ・介護実習室や医療的ケアの機器を安全かつ効率的に活用している。 ・授業時間以外での自主トレーニングなど、積極的に施設・設備などを活用している学生が多い。
【改善のための方策】	<ul style="list-style-type: none"> ・時代のニーズに合わせて介護機器を更新していく。 ・パソコン実習室は他学科、社会人と共有するため、計画的な活用を調整する。
【関係者評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・学校という社会資源を外部の人も使えると良いのではないかと。 ・学校に介護機器を増やすなら即戦力を養える物が良い。(マッスルスーツ、スライディングボード、介護負担軽減の機器、道具) 技術向上はやる気につながるから。 ・保育の現場でPCの多様活用ができる人材が必要と感じる。(保育士対象のPC教室を開いてほしい)
6. 学生生活支援	
【現状と問題点】	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に個人面談を行うことで、学業や学生生活上の悩みを早めに察知できるようにした。また長期休暇前後には学生の生活面、健康面のチェックを行い、全校的に状況の取りまとめ、把握をしている。 ・感染症の対応についての確に対処できた。 ・本学独自の奨学金制度について、制度内容やそのシステム等、学生募集の段階から紹介するとともに、入学後も対象となる学生には引き続き指導している。また日本学生支援機構等、公的な奨学金制度については専任を設け、入学後速やかに希望学生を対象に説明会を実施。進級・卒業後も適切な指導を行い、スムーズに手続きが進められるようにしている。 ・24時間対応保険及び正課中を対象とした保険に加入して、万が一の場合に対処可能としている。 ・年に1度、健康診断を実施。 ・放課後や授業のない日も積極的に学習・実習・活動する学生の姿が多くみられた。 ・学生会を組織。学園祭・文化祭、スポーツ大会、町内清掃活動等の企画・運営、管理を通じて学生相互の絆を深めることができている。 ・火災・地震を想定した危機管理マニュアルを整備し、教職員で共有。また年2回の避難訓練を行い、防災意識を高めると共に、万が一の発災に備えている。 ・運動関係、文化系とも部活動を充実させた。体力向上、友人の輪の拡大、チームワークの重要性の実体験、コミュニケーション力向上等に寄与している。 ・劇団四季の「アンデルセン」公演を観劇。心を豊かにし、日頃のストレス解消にもつながっている。 ・体調不良学生に対してはSNS等を活用し、即時対応・支援・指導を行っている。 ・「自立」への意思形成が遅く、就職活動に踏み出さない・活動範囲を広げるのが遅い、などの学生が存在する。 ・経済的問題や家庭環境に問題をかかえる学生がいるため、教員の対応力の強化が必要となっている。 ・社会人基礎力を身につけ、卒業後自立した社会人になれるよう生活指導を含めて指導した。特に気になる学生については、学生の体調把握や食生活についても

	<p>指導している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達障害を抱えていたり、メンタル面が弱かったりする学生が増加傾向にある。、面談を行うだけでなく、時間を作り、学生と時間を共有し安定した学生生活を送れるような支援を行うことを心がけた。それにより退学希望や、授業料等困難学生が出ていないと考えられる。今後も同様な支援を行う必要性があると感じられる。
【改善のための方策】	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻理由の殆どが体調不良であるため、単純に時間厳守を指導するだけでなく、体調管理に関する指導を行う。 ・出欠席管理システムの構築、生活支援のためのグループウェアを導入し、今以上に教員間での情報共有を進める。スケジュール管理においては学生が容易にチェックできるように便宜を図る。 ・人手不足を背景とする「活動前倒し」に対応した学生指導を行う。 ・キャリア開発の重視点の移行 [「マッチング・就職支援」 → 「キャリアの自律」 (環境の変化に対して自律的に適応する能力。生き抜く力)] を踏まえたキャリア教育を実施する。 ・「ジョブ・カード<学卒者等用>」活用の定着を図る (進路-学生-学科)。 ・「無料職業紹介事業関係業務取扱要領」等の改正に対応した業務を推進。 ・就職活動関連イベント情報を集約し、SNS等で早期に周知する。 ・全ての学生とより近い距離で話ができる環境を作る必要がある。学生生活のカウンセリングや進路に関するキャリアカウンセリングに加え、学生への総合的な対応力を教員が持てるよう、学科、学校での研修などを提案していく。 ・挨拶の励行、礼儀を弁えた対応ができるよう指導する等、学生の手引きに則った指導を心掛けるだけでなく、学生として相応しい身だしなみについて、これまで以上に徹底した指導をする。 ・個人面談において、教員が学生を尊重し話を聞く、対話することを大切にしたい。
【関係者評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・心の問題を抱えた学生が多い中、就職後も寄り添っていくことが大切。 ・発達障害等に対して、職員も勉強が必要であると感じた。 ・県内私立大学では 30 人中 6 人が実習に行く状態にすることができなかったという情報もある。 ・経済的支援の深刻化が急激に進んでいると感じる。 ・カウンセリングの充実が必須だが、しっかりできているように思う。
7. 管理・運営	
【現状と問題点】	<ul style="list-style-type: none"> ・大幅な教室変更により実習設備、機材、部品等の移動を要したが、事前の管理・整備が功を奏し、移動後もスムーズに実習授業が行えている。 ・保管期限を過ぎた書類について、専門業者に委託し、安全に廃棄処分した。 ・セキュリティーソフトウェアのアカウントを更新した。 ・平成 29 年 5 月末から施行された改正個人情報保護法について教職員全員に周知・徹底し、遵守している。 ・基本的生活習慣が身につけていない学生がいる。掃除等の指導も必要。 ・日々の清掃は学びの環境を自らの手で整理するよう指導している。 ・クラス担任だけがクラスを管理・把握するのではなく、学年間及び副担任とも情報共有をし、手厚い学生指導ができた。それにより今年度は退学者を 2 名に抑

	<p>えることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科、分野、学年という3つの体制を元にして、職務と実務の効率化と迅速化に心掛けてきたが、滞りや偏りがいまだにあり、組織的な改善が求められる。 ・それぞれの専門家が持っている能力を十二分に発揮し、学科運営を目指した。 <p>また、本学での経験が浅い教員とある程度の経験年数のある教員で業務を進められるような機会を持ち、専門性とは違うところでもそれぞれが同じ目的意識を持ち業務を遂行できるよう努めた。</p>
【改善のための方策】	<ul style="list-style-type: none"> ・個人情報保護法の遵守について、引き続き徹底する。 ・教室及び共用部分について、日頃から整理整頓、清潔を保つ。定期的なチェックを実施し、不要物については速やかに処分する。 ・セキュリティーソフトウェア更新（継続）。 ・教室移動等に伴い、多くの備品を移動または廃棄したので、備品台帳との整合性を確実なものとする。 ・実務者研修等の動向を関連する学科全ての教員が把握できるように努める。 ・教育・学生指導に関する職務に加え、実習関係、社会人講座の実務に偏りや滞りが無いよう、計画的・組織的な体制を整備する。 ・それぞれの専門家が同じ方向を見ながら、さらに高いレベルで学習環境を作り出せるよう統括していきたい。
【関係者評価】	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの目標を持つこと。自らのフォローをどうするか。これまで同様、教育者の質、運営環境の充実に注力していく必要がある。 ・学生の生活、人生に対してのより良いアドバイスができる環境の構築が必須。

以上